

建築家の

# 往復書簡

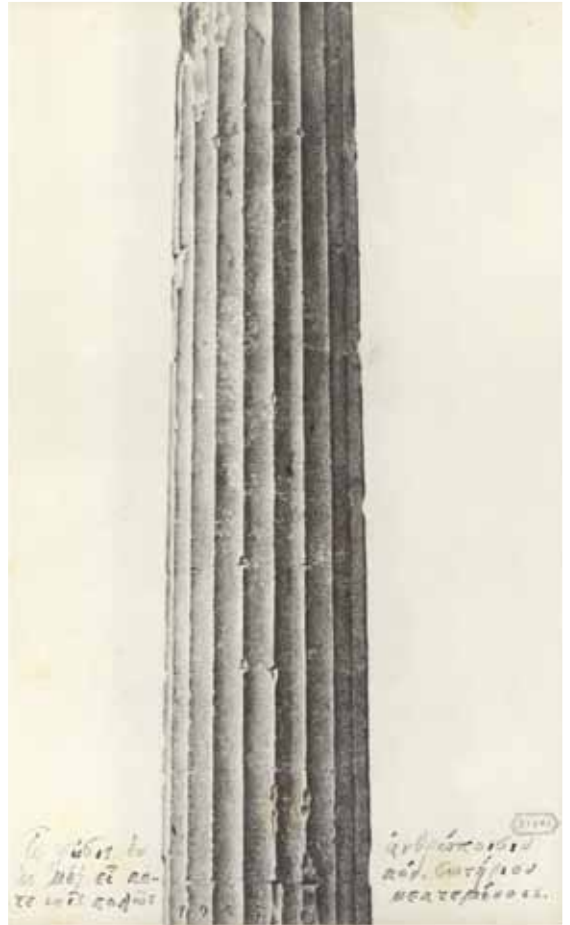
磯崎新 — 原広司

8 .....

## ARCHITECTUREと 数学原理を問う…

原広司  
磯崎新

いよいよ、原広司数学原理主義者説をいうことになりました。この往復書簡の企画にのったのは、建築家・原広司を五〇年あまり観察し、建築家としての仕事だけでなく、プライベートにおいても、妙な行きがかりで一緒に住めなくなった私の子供たちを親代りに面倒をみてくれたりしても、きちんと礼を申しあげる機会を失っており、生涯にわたる

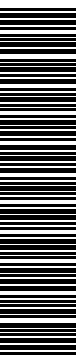


パルテノンの柱[インク・鉛筆、紙/1955]  
[ドローイング:白井成一/所蔵:川添登]

Arata Isozaki

磯崎新

非礼を返す機会でもあるだろうと思っただけでもありませんが、そのひとことをいうのに、二年も過ぎてしまい、あげくに、私たちは建築家なのだから、家庭内事情などは後回しにして、おおよとかがわかる建築家の思想について語りはじめる。逃げるな、といわれそうな気もするけど、やっぱり、ARCHITECTUREと数学原理を問う相手と場所はこ



9011149140

**LIXIL**  
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

トステム・INAX・新日軽・サンウエーブ・東洋エクステリアは、2011年4月1日より、株式会社LIXILとしてお客さまの多様なニーズに対応した商品とサービスを提供してまいります。

にしかありません。

昨年から、白井晟一の展覧会がひらかれ、同時にいくつかの出版物がだされました。「白井晟一、建築を語る——対談と座談」中央公論新社(2011)では原広司さんは一九六七年に、私は一九八一年にそれぞれ「聞き手」になっています。質問者です。他の先輩たちは対談。私たちは何ごとかを体験しているある存在者から、その何ごとかを聞きだす役をふられていた。ARCHITECTUREを問おうとしている。ユニーパリス役ですか。ポール・ヴァレリーは長々と対話させながら、つまるところ建築は建築だといわせている。トートロジックで説明できないのは東西同じではありません。私たちはひと世代下の後続の立場ですから、何ごとかは何ごとだ、といいきるわけにはいかない。お互いに質問のしかたを工夫した形跡がみえてきておかしかった、というのが、この対談

# 磯崎新集

磯崎さんが西に行き、私が南へ行く。これは、ひとつの構図のとり方の重ね合せであると思っていました。おそらく、七〇年代の磯崎さんの古典建築に対して、私が集落を檢討の対象としたのと相關しているのでしょう。

西へ行く意味は、中国、インド、イスラム世界、そしてヨーロッパと、日本からの経路が描かれて、文化の横断「トラヴァーシング」であり、その内容はお話の通り、現実には極めて困難な経路をたどることになるのですが、解りやすくも

タ文学の河口の岸々等々とは別の何か。ロートレアモンに気づくのは、二、三年後のことで、学生のひとりに、「あの角のアパートに、彼は住んでいた」と、教えられたからです。それから、シユールレアリストたちが、彼に寄せたオマージュの作品の数々やエッセイがあることも知りました。「手術台のうえ

集を読みなおしての感想です。

何ごとかは、東西にまたがって ARCHITECTURE を体験しているという基本形の認識は共通しており、原さんは、そこで目の前にいる ARCHITECTURE は、東西のいずれに所属するのか、と問いかけている。西をいって煙に巻いても、白井晟一という正体は東ではないか、といいきっている。いっぽうで十数年後の私は、ひたすら、西の中味をその内側から問うています。これはその頃にはやった「デコンストラクション」のやりかたです。まったく意識していなかったけど、設問のしかたをみると、私たち相互の思考法が違っていることがわかります。原さんは東/西(日本/西欧)の文化的差異を手がかりにしている。私は外部としてみえるその差異が自明の理となってしまうために、仕方なく内部の差異にこだわっている。この違いを強引に整理すると(間違っていたら御免なさい)、

# Hiroshi Hara 原広司

原さんは東西に共通する普遍的な論理を信じているから、ARCHITECTURE も同時にそれを体験する人格もが一貫した存在であるとみなしている。これにたいして、私は、東西には、あいまいな文化的翻訳しか成立しないから、その両方を体験すると分裂してしまうと考えている。言語をロジック=数学的アルゴリズムとみるか、言語の用法は文化的慣習に支配されるとみるかの違いです。数学原理主義者・原広司を証明するには、こままでの説明では不十分で、更にいくつもの症例を挙げる必要があります。今回は字数切れ、次回以降にさせて下さい。

二〇二二年二月十二日

磯崎新

あります。それぞれの文化の圏域の境界は、堅固である。そうした条件をもつひとつのコンティニウム=連続体を、横断してゆく磯崎さんのプロセスをお見受けすると、最初におっしゃった「現場」の意味も、そして ARCHITECTURE の概念も地理学のうえで具体性をもってきます。この磯崎さんの構図に対して、私がこの十年あまり南米を訪れ、インスタレーションのような実験住宅を建てて回っていることについて少しばかり説明させて頂きます。

の「ミシンとこうもり傘」も、ことによるとロートレアモン自身のことを表現したのではないだろうか。デペイズマンの「国籍を剥奪して、国外に追放する」シユールレアリスムの美学は、例えばマックス・エルンストあたりが、ロートレアモンの心情に気づいたのかもしれない——(静かな瀧口修造さんや、活力に

溢れた栗田勇さんを思い出しますね)。

今日、「南」が意味するところは、釈迦に説法でしょう。磯崎さんでしたら、チェ・ゲバラで語るころを、私たちが若い頃共通して学んだシユールレアリスムの側面から「南」とらえたに過ぎません。昨年未だ、ボリビアのラパスで建ててきました。いずれにせよ、(離れた場所)です。

「南」で見るのは、貧困と差別です。これらは、現代の病理学的現象で、ラテンアメリカ諸国では、デペイズマンのような風景が展開しています。世界の健康保持の戦略は、あらゆる角度から、これに感染しないよう予防のうえで作用します。建築も美術も、その外ではありません。富は善、貧困は悪。従って、磯崎さんの「現場」のような感覚は、残念ながら、私には欠如しております。日常的に語るうえで、は、解散性「ディスクリート」は、今日の情報の時代に対する概念ですが、「南」にあつては、病理的な現象のひとつの記録として展開することを期待しています。ARCHITECTURE の二画について。

「子息に対しては、何もできておらず、お言葉は過分です。むしろ、逆に愛子様に、娘の遊のことに感謝申し上げますべきところです。」

二〇二二年二月二三日

原広司



南米ラパスの実験住宅[写真提供:アトリエ・ファイ建築研究所]

いそさきあらた——建築家一九三三年生まれ一九六六年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。

はらひろし——建築家一九三六年生まれ一九六四年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学生産技術研究所一九九七年、退官、同名教授。一九七〇年よりアトリエ・ファイ建築研究所と設計共同。一九九九年より原広司+アトリエ・ファイ建築研究所所属。